

エンマとラ・ゲリーヌ

十九世紀文学とヒステリー

菅谷 憲興

文学と同時代の知との関係は、十九世紀の文学史にとって依然として本質的な問題の一つをなしている。ごく図式的に述べるならば、一方で、それまでその境界線が曖昧であった文学と科学という二つの領域が次第に分離し、科学的言説に真理のディスクールとしての独立性が付与されるようになる。他方、文学の側に見られるノスタルジーは、バルザックやゾラといった作家に典型的なように、諸言説に対する統括的な立場に自らを置こうとする野心をいまだ完全に断念してはいない。ヴォルフ・レペニース等の論者によって指摘されたこの一般的な見取り図は¹、フローベールのような、あれほどまでに文学作品の自律性に固執した作家の著作が、何故おびただしい数の異質な言説への参照に溢れているのかを、とりあえず我々に納得させてくれよう。十九世紀小説とは他の諸々の言説との対話の場であって、そのことは、『ボヴァリー夫人』から『ブヴァールとペキュシェ』へといたるフローベールの諸作品といえども決して例外ではない。かくして文学が世界に対する深い問い掛けである以上、個々の文学作品へと注ぐ我々の眼差しは、それら各々が必然的にはらむ歴史性に対してとりわけ敏感であらざるを得ない。一篇の小説作品を織り成す言葉の一つ一つが、果たしてどこから発し、どこへ向けられているのか。この言葉の偏差とでも呼ぶべきものを解きほぐしていく上で忘れてはならないのは、文学の歴史性がすぐれてディテールの問題だということであろう。実際、対話の場としての文学作品において、「歴史」は細部の丹念な読解を通じてしか浮かび上がってこない。そのことを具体的に確かめるべく、ここでは『ボヴァリー夫人』の中の、通常殆ど注目されることのないあるエピソードを読んでみたい。いわば推理小説の探偵にならって、このごく短いエピソードを謎解きすることにより、同時代の多様な知が織り成す意味のネットワークの中へとフローベールの文学テクストを送り返すことができよう。

¹ Wolf Lepenies, *Les Trois cultures*, traduit de l'allemand par Henri Plard, Éditions de la Maison des sciences de l'homme, 1990, pp. 1-4.

問題のエピソードは、第二部、第五章の末尾。ヨンヴィルへの転居以来それなりに平穏な生活を送ってきたエンマは、だが少し前から、レオンが自分に対して抱いている淡い恋心を意識し始めたところである。心の底ではその臆病な愛を分かち合っているもの、それに応えるだけの勇氣はいまだ持ち合わせていないエンマは、逆にこの世で最も貞淑な女性であるかのように故意に振舞うことで、自らの欲望を何とか押さえ込もうとする。しかしながら、自分自身の「偽善」(197²)に嫌気をもよおし、またシャルルの愚かにも満足しきった様子が否応なしに搔き立てずにはいない「数々の憎しみ」(197)に苛まれて、トストを発って以来おさまっていた神経の病が再発するにいたる。偶然そのような発作の一つに立ち会った女中のフェリシテは、女主人の「打ちひしがれ、息をはずませ、ぐったりと、低い声ですすり泣きながら、涙を流している」姿を見て、その病状がエンマのそれと奇妙によく似たある女性のことを思い出す。

「何故このことを旦那さまに仰らないのですか？」これらの発作の最中に入ってきた女中は、彼女に尋ねた。

「神経なのよ」とエンマは答えた。「旦那さまには言わないで。心配させてしまうから。」

「ああ、そうだ」とフェリシテは言葉を継いだ。「私がこの家に来る前に、ディエップで知り合いだったル・ポレの猟師のグランおじさんの娘、ラ・ゲリーヌが、ちょうど奥さんのようでしたわ。本当にたいそう陰気な娘で、家の戸口に立っているのを見ると、まるでドアの前に張った吊いの黒幕みたいでしたよ。病というのは、どうも頭の中に霧のようなものがあるらしくて、お医者さんも司祭さんもどうすることもできないのです。病があまりにひどくなった時は、一人で海辺に行くのですが、税関のお役人が巡回の途中、その娘が腹ばいになって、砂利の上で泣いているのをよく見かけたそうです。それがね、結婚した後は、すっかり治ったって話ですよ。」

「だけど、私の場合は」とエンマは答えた。「こうなったのは、結婚してからなのよ。」(198)

まったくの副次的な挿話として読み飛ばしてしまいかねないこの一節は、確かにさほど重要性を持たぬかに思われる。実際、ここで語られているラ・ゲリーヌなる女性は、この後二度と物語の中に登場することはなく、女主人公エンマの運命にも何ら直接の影響をもたらさない。とはいえ、一つの章の

² 『ボヴァリー夫人』のテキストへの参照はすべて次の版により、引用には頁数を付す。Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, édition de Jacques Neefs, Librairie Générale Française, « Le Livre de Poche classique », 1999.

末尾といういわば戦略的な場にわざわざ位置付けられている以上、この短いエピソードが完全に無償であるということもまた考えにくい。フローベールが典型的な削除の作家であったというのは今日よく知られている通りだが、この一節が最終的に残されたことにはそれ相応の理由があるはずだと考えるべきではなからうか。

ところで、少し注意深く読んでみれば、ラ・ゲリーヌとエンマをテーマ論的に結びつける細部を幾つか指摘することはさほど難しいことではない。例えば、ここで強調されている医者と司祭の無能ぶりは、エンマの病についてもそっくりそのまま当てはまる。とりわけ司祭への言及は重要であり、これはこの後に続く教会訪問のエピソード、ブールニジアン神父の救い難い卑俗さが浮き彫りになるくだりを直接に予告しているものだ(第二部、第六章)。一方、「まるでドアの前に張った吊いの黒幕みたい」という記述は、エンマの葬儀の際の父親ルオーの反応(「吊いの黒幕を見て、広場で気を失った(483)」)とひそかに繋がっている。この細部は、従って、小説全体を通じて散見される死の符牒の一つであり、ジャック・ネーフが「遡行的決定論」と呼んだ現象に属している³。すなわち、少なからぬ数のテクスト的な要素が、物語の終わり(=死)と相関関係に置かれており、その意味では文学テクストは他ならぬその終わりから生み出されるのだと言えるだろう。しかしながら、これらの明白なテーマ論的連関にもかかわらず、エンマとラ・ゲリーヌの間には依然として決定的な相違が存することもまた明らかである。エンマが物語の論理によって宿命的に死へと追いやられていくのに対して、ラ・ゲリーヌの方は、その名(*la Guérine*)が端的に示すごとく、治癒すべき(*guérie*)存在として示されている。では、この違いはどこから来るのであろうか。否定しがたい類縁性にもかかわらず、これら二人の虚構の女性を最終的に分かちつのは何なのか。要するに、ラ・ゲリーヌという、その説話論的な無償性が読者を幾分か当惑させずにはおかないこの作中人物は、一体誰なのだろうか。

この問いを考えるために、まずはアヴァン・テクストに目を通してみよう。このエピソードの執筆はさほど大きな困難を呈したようには思われぬが、それでも問題の一節に関わる下書き(*brouillons*)は全部で6つ存在している。そのうち第二番目の下書き(*g 223³, p 4 v^o*)にラ・ゲリーヌの話の最初の萌芽が見出されるが、いささか驚かされるのは、フローベールが最初、フェリシテではなくオメーをエンマの感情の激発に立ち合わせようと考えていたら

³ Jacques Neefs, "*Madame Bovary*" de Flaubert, Hachette, « Poche critique », 1972, pp. 58-59.

しいことだ。「ある日、[エマ]はオマーの前でほとんどすすり泣いた。」感情の微妙な嬖といったものにはいたって盲目なのがオマーの特徴である以上、これはいかにも不器用な着想と言わざるを得ないが、案の定、同じ草稿上の書き換えによってオマーは女中に取り替わられることになる。それと同時に、行間に次のような台詞が素描される。「奥さんは、結婚する前の某女性 (une telle) のようですね。」この記述は、まだきわめて抽象的ではあるものの、というかむしろそれ故にこそ、大変示唆的である。そこで示されているのは、類似 (comme) と同時に、ある決定的な差異、つまりいまだ名を持たぬこの女性⁴が病気であったのは結婚前 (avant) であるという差異に他ならない。この対比の効果は、続く第三の下書き (g 223², p 233 v°) においてはさらに一層強められることになる。おそらく女主人を励ますためであろうか、フェリシテがX嬢 (la X) の治癒のことを持ち出すと（「だけど、彼女が結婚してからは、すっかり治ったそうです」）、それに対してエンマはむしろ二人の相違点を強調する（「だけど、私の場合は、[...] こうなったのは、結婚した後 (après) なのよ」）。従って、執筆のこの段階で小説家の注意を引いていたのは、悪気 (vapeurs) のこれら二つの症例の間に見られる、結婚前と後という対照であることが確認できるだろう。おそらくここに、この不思議なエピソードの意味を解く鍵もあると思われるのだが、しかしながら、この対照自体が依然として謎めいたものであることに変わりはない。それでは、一体どんな意味をそこに読み取ればよいのだろうか。

結婚がラ・ゲリーヌにもたらす治癒の効果が、対比によってエンマの夫婦生活の悲慘を際立たせることは、とりあえず指摘しておかねばならない。事実、『ボヴァリー夫人』の女主人公は、十九世紀の小説的想像力にとって非常に重要だった一つのテーマ、ジャン・ポミエ等の研究者によって夙に指摘された「不幸な結婚をした女性」のテーマの典型的な例証である⁵。とはいえ、ラ・ゲリーヌのエピソードの意味が、この社会的・文学的なテーマを強調するのにとどまらないことは言うまでもなからう。それ故、ここでもう一度、次のように問うてみるべきであろう。結婚が一方には治癒をもたらし、もう一方には病の原因となったのは一体どうしてなのか。

⁴ 若きフローベールやその友人達が通っていたパレ＝ロワイヤル街の娼館の女主人ゲラン夫人 (la mère Guérin) は、ラ・ゲリーヌの起源の一つとみなしうるだろう。この後の我々の論考が示すように、ラ・ゲリーヌのエピソードは明白に性的な意味合いを帯びている。

⁵ Jean Pommier, « La Muse du Département et le thème de la femme mal mariée chez Balzac, Mérimée et Flaubert », *L'Année balzacienne*, 1961, pp. 191-221.

この厄介な問いに答えるべく、ここで少し医学史を参照してみたい。ところでまず注意しておきたいのは、先ほど悪気 (vapeurs) という言い方をしたことに關して、女主人公の身体的・精神的不調を指すために、筋書き (scénarios) や下書きなどのアヴァン・テキストにおいてしばしばこの語を用いているのは、実は他ならぬ小説家自身であるということだ。例えば、筋書きの一つには次のように記されている。「彼女は悪気にかかる。神経性の痙攣 (gg 9, f° 9 v°) ⁶」。この記述そのものは小説第一部のトスト時代に関わるもので、我々がいま分析の対象としているヨンヴィルにおける病の再発に關しては、同じ段階に属する筋書きに次のような記述が見られる。「彼女は身体的に衰弱し、トストの時よりさらに強く再びとらえられる (est reprise) (gg 9, f° 13 v°) ⁷」。「悪気によって (par les vapeurs)」をこれに補うべきなのは言うまでもない。この再発以降、エンマは自らの病が結婚生活と不可分であることを確信するにいたるきわめて重要な場面である。さらにまた、決定稿に關して言えば、vapeurs という語はたった一度だけ、それもシャルルの母親の口を通じて姿を見せる。

「お前の妻に何が必要なか知ってるかい」とボヴァリー老夫人は言葉を続けた。「何か強いられた活動、手仕事だよ。あの人も、他の多くの女達のように生活の糧を稼がなければならなかったら、あんな悪気にはかかりっこないのさ。頭に色んな考えを詰め込んで、無為に暮らしているから、あんな病になっちまうんだよ。」 (219)

医学思想史の文脈においては⁸、vapeurs とは、おもに十七、十八世紀に流布した理論で、ヒステリーとヒポコンドリー (心気症) を同時に包含している。ただし前者は女性特有の、後者は男性特有の病とされていたことはよく知られている通りである。そもそも hystérie という語は子宮を意味するギリシャ語 hystera に由来しており、実際、ヒポクラテス以来の医学的伝統はしばしばこの病の原因を子宮の変調に帰してきた。そしてまさにこの流れの中で、古典主義時代の著述家達の多くが、ヒステリー性の悪気の起源に性交渉の不

⁶ 『ボヴァリー夫人』の筋書きに關しては、次の版を参照のこと。Plans et scénarios de Madame Bovary, présentation, transcription et notes par Yvan Leclerc, CNRS Éditions / Zulma, 1995, p. 14.

⁷ Ibid., p. 16.

⁸ ヒステリーに關する医学思想の歴史については、例えば次の三つの著作を参照のこと。Ilza Veith, *Histoire de l'hystérie*, traduit par Sylvie Dreyfus, Seghers, 1973 ; Étienne Trillat, *Histoire de l'hystérie*, Seghers, 1986 ; Nicole Edelman, *Les métamorphoses de l'hystérique*, La Découverte, 2003.

在を見て取ったことも、しばしば指摘される場所である。今日の我々にはきわめて突飛に思われようが、この時代の医学理論によれば、禁欲によって子宮の中にたまった悪性の体液が発酵して、そこから蒸気 (vapeurs) が生じる。この蒸気が体内を脳にいたるまで上昇していく過程で、呼吸困難、痙攣、精神錯乱といった様々な病的症状を引き起こすとされる。要するに、ヒステリーとは女性に固有のセクシュアリテの病とみなされていたのであり、時に「子宮性呼吸困難」などと呼ばれもしたこの病の象徴が、女性特有の生殖器官としての子宮であったと言えよう。

ところで、ほぼ同じ頃、ヒステリー性疾患を脳または神経系の中に位置付ける第二の理論が登場してくる。相変わらず vapeurs という呼称自体はなくなるもの、もはやヒステリーは純粹に性的欲望に関わる病であることをやめ、徐々に神経の病と捉えられるようになる（「神経症」という語がスコットランドの医師ウィリアム・カレン William Cullen によって造られるのは、まさに十八世紀後半のことである）。例えば、『百科全書 *Encyclopédie*』の「Vapeurs」の項目には次のように記されている。「下腹部から脳へと上る蒸気について一般大衆の抱いている通念は、誤ったものであり、理論および解剖学によって否定される。この蒸気と言われているものは、内臓の神経線維の興奮に他ならない。」かくして十八世紀以降、ヒステリーは次第に子宮から切り離されるのであり、この第二の潮流が、次の世紀の終わり頃、シャルコーの神経学的アプローチへと結実するのはここであえて指摘するまでもないだろう。

ごく単純化するならば、おおよそ以上が、十九世紀初頭におけるヒステリーに関する医学思想の状況である。そこでは二つの相矛盾する理論が対立しており、その状態は少なくとも世紀半ばまで続くことになる。子宮から発する蒸気 (vapeurs) の仮説それ自体はほぼ決定的に否認された後も、それでも少なからぬ数の医学者達がヒステリー性疾患の起源を子宮に求めることをやめようとはしなかった。幾つか例を挙げると、子宮説の熱烈な擁護者であったルイエ＝ヴィレルメ (J.-B. de Louyer-Villermay) は、有名なパンクークの『医科学事典 *Dictionnaire des sciences médicales*』(1812-22) の「ヒステリー」の項目の中で、この病を「子宮性神経症」と定義している。同様に、ヒステリーを色情狂とともに「女性の性的神経症」の中に分類しているのは、『哲学的疾病分類学 *Nosographie philosophique*』(1797-98) の著者ピネル (Ph. Pinel) である。また、この理論の最後の支持者の一人、ランドゥージ (L. Landouzy) は 1846 年に『ヒステリー総論 *Traité complet de l'hystérie*』を出版しているが、

フローベールが『サランボー』執筆に当たってこの書を参考にしたことはよく知られた事実である。このことはすなわち、フローベールが描いた古代カルタゴの女主人公が、十九世紀の医学理論（子宮性ヒステリー）にその人物造形の源泉の一つを負っていることを意味していよう。

『ボヴァリー夫人』の分析に戻ろう。今や明らかなように、ラ・ゲリーヌは、語の本来の意味での *vaporeuse* である。あるいはより正確に言うならば、子宮説によって定義された通りのヒステリーを、この虚構の女性は体現している。ラ・ゲリーヌは、いわば医学的ディスクールのパロディーであって、悪気性疾患の主要な特徴を呈している。その病は「頭の中にある霧のようなもの」として示されるが、これが子宮から上ってくることには異論の余地がないだろう。性的禁欲に起因する以上、その病が結婚の後に消えてなくなるのもしごく当然のことだと言える。実際、子宮病因説の支持者達にとって、結婚こそ、恒常的で節度ある性交渉を保障してくれる以上、ヒステリーに対する最も有効な治療法であったということを指摘しておこう。当時の医学文献を繙くと、多かれ少なかれラ・ゲリーヌの症例を思わせずにはおかない数多くの例が見出される。ここでごく一例を挙げれば、前述のピネルはある若いヒステリー患者の症例の報告を、次のような実を示唆に富んだ注釈で締めくくっている。「だが、あらゆる再発の危険性を予防するために、私は結婚の必要性を大いに強調した。[...] かくして、自然の願いが満たされるとともに、堅固な治癒がもたらされた⁹。」

さてそれでは、エンマの *vapeurs* はどの理論に帰属しているのだろうか。神経説にと、とりあえずは答えておこう。問題のエピソードの中で女主人公自身が「神経なのよ」と述べているのは、決して無意味な細部ではない。この点に関してここで特に想起しておきたいのは、エンマの病の原因を理想と現実との剥離に求めるのが、フローベール批評の定説の一つになっていることである。ところで、翻って十九世紀前半の医学的知の方に目を向けると、当時 *aliénistes* と呼ばれた精神病医達の多くが、情念の混乱から派生する神経系の不調にヒステリー性神経症を帰していたことが分かる。要するにヒステリーは情念の問題だとされるわけだが、実はこれは、既に前世紀に悪気の病因論として、例えば先に挙げた『百科全書』の項目「*Vapeurs*」の中で主張されていたところでもある。

⁹ Philippe Pinel, *Nosographie philosophique ou la méthode de l'analyse appliquée à la médecine*, troisième édition, J. A. Brosson, 1807, t. 3, p. 282.

多くの人達が考えるように、この病は身体よりもむしろ精神を損なうのであり、災いは想像力の中にある。実際、認めなければならないのだが、その最初の原因は倦怠もしくは過度の情念であり、それらは精神を責め苛んだ挙句、身体をも巻き込むのである。

『百科全書』の項目はまた、この情念病因説がある奇妙な社会的差異化を伴っていたことを示している。度を越した、錯乱した情念によって引き起こされる以上、悪気は「身体を酷使せず、手仕事によって疲労することも殆どないが、大いにものを考え、夢想する人々」を好んで襲う。この見解が、先に引用した母親ボヴァリーの台詞、エンマの病の原因に関する彼女の説と正確に一致することは明らかだろう。この論理によれば、悪気にかかりやすいのは、多かれ少なかれ人工的で安楽な生活を送る余裕のある人々であって、日々の生活に追われる庶民階級はこの病とは無縁だということになる。当時の医学的思考にとって、ヒステリーとはまさに近代文明の産物であり、その際とりわけ危険なものとして糾弾されるのが、他ならぬ想像力であったという点に留意しよう。

エンマのヒステリーについては、既に多くの論考が存在する。例えば、クロディヌ・ゴト＝メルシュは、女主人公の病理的側面がアヴァン・テキストにおいてはより一層際立っていたという貴重な指摘を行っている¹⁰。もちろん決定稿においても、エンマの人物造形の中にヒステリーの要素が入り込んでいるのを見て取るのは、決して難しくない。しかしながら、エンマとラ・ゲリーヌという二人の女性の病理の間に見られる対照には、今日まで研究者はまったくと言っていいほど注意を向けてこなかった。既に検討したように、これら二人の vaporeuses は、それぞれ異なる医学理論を体現しているとみなすことができる。エンマの物語の中にラ・ゲリーヌのごく短いエピソードを挿むことにより、『ボヴァリー夫人』の作者は認識論的に異なった二つのヒステリーの表象を対置しているとも言えるだろう。言い換えれば、問題の一節は、二人の虚構の女性を通して、当時の対立する二つの医学的言説を舞台に乗せていることになる。

ところで、この手法そのものはフローベールの読者にはなじみのもので、晩年の小説、特に『ブヴァールとペキュシェ』において大いに活用されることになるものだ。おそらく、『ボヴァリー夫人』の中に存在している百科全書的な位相は、普通考えられているより遥かに重要なものだと思う。実

¹⁰ Claudine Gothot-Mersch, *La genèse de Madame Bovary*, Genève, Slatkine Reprints, « Références », 1980, p. 194.

際、次のような『愚言集』もしくは『紋切型辞典』の一項目を想像することはきわめて容易であろう。「矛盾。ヒステリー：子宮から生じる。／神経症である。」往々にしてその心理小説的な側面が特権視されがちだとはいえ、フローベールのこの最初の傑作長編には「ブヴァールのなもの」の萌芽がいたるところに認められる。イヴァン・ルクレールがフローベールにおける生成過程上の円環性を問題にしたのは、この意味での射た指摘であり、確かに「初期の、そして成熟期の作品のすべてが、最後の作品に基づいて書かれている」と言うことができよう¹¹。諸々の言表やイデオロギーを付き合わせ、それらを矛盾へと追い込んでいく作業は、フローベールのエクリチュールにとって本質的なものだが、ラ・ゲリーヌの挿話は、『ボヴァリー夫人』が知の言説についての根本的な問い掛けを既に十分に含んでいたことを証している。

しかしながら、作中人物としてのエンマの持つ強度が、以上見てきたようなパロディー的次元には還元されないことも、やはりいま一度確認しておかねばならない。それこそ医学的言説の単なるパロディーにすぎないラ・ゲリーヌとは違って、エンマはその病の帰結をいわば極限まで推し進め、周囲のすべてを混乱に陥れずにはおかない。その不幸は徹底的に侵襲的であり、ラ・ゲリーヌの悪気を治癒するには結婚という制度だけで事足りたのとまさに好対照をなしている。要するに、子宮性ヒステリーとは、ブルジョワ的社會秩序を補強するものでしかなく、フローベール独特の言い回しを用いるならば、端的に「愚か（bête）」なものである。反対に、エンマのヒステリー、その否定しようのないモデルニテは、とりわけその飽くなき理想の追求によって、共同体の安定した秩序を掘り崩さずにはおかない。「災いは想像力の中にある」と、先に引用した『百科全書』の項目には記されていた。凡庸さがすべてを覆い尽くそうとする時代、その支配の貫徹にあくまで抗うのが、想像力のスキャンダラスな力であり、エンマの悲劇はそのことを端的に示していると言えよう。

エンマの運命において読書が果たした役割については、これまでしばしば語られてきた。「読書する女」は近代文学が創造したまさに一つの典型だが、『ボヴァリー夫人』の女主人公は疑いなくその中でも最も有名な一人である。ところで、ここで指摘しておきたいのは、小説が当時の医学的言説によって、特に神経症の原因として激しい非難的となっていた事実である。数多くの

¹¹ Yvan Leclerc, *La spirale et le monument. Essai sur Bouvard et Pécuchet de Gustave Flaubert*, SEDES, 1988, p. 19.

医学書の著者達が表すこの「小説憎悪」は、フローベールの注意を引かずにはおかなかったようで、実際、『ブヴァールとペキュシェ』の筋書きの一つには次のような記述が読まれる。「道徳書の中に—医学。小説憎悪。小説はあらゆる神経病の原因である (gg 10, p 42 v^o)¹²」。あるいは、未完に終わった『ブヴァール』第二巻にあたる『愚言集』の草稿には、まさに「小説憎悪 (Haine des romans)」と題された項目が準備されており、これはおもに文学を批判する医学の言説の抜粋から構成されるはずであった。次に引用するのはそのうちの一つ、『医科学辞典』所収のエスキロールによる「狂気」の項目からの抜粋で、その内容がどことなくエンマの物語を連想させなくもない。「我々の若い娘達に施されている教育の欠陥、[音楽や絵といった] 純粋に娯楽のための稽古事に対する嗜好、さらには小説の読書といったものが、少女達に早熟な活動、年齢に相応しからぬ欲望、また現実のどこにも見出すことのできぬ架空の完璧さについての観念を付与するのである (g 226⁷, p 23)」。文学の有害な影響を声高に述べ立てることによって、医学的言説は自らが道徳のディスクルールであることをはからずも露呈している。要するに秩序の言説が何よりも恐れるのが他ならぬ想像力であり、ヒステリーはそのネガティブな力の現れとしてとりわけ忌避されざるを得ない。

このささやかな考察を閉じるに当たって、最後にボードレールの有名な『ボヴァリー夫人』論を取り上げたい。よく知られている通り、エンマを「ヒステリーの詩人」と名付けたのは『悪の華』の詩人である¹³。この表現は既に何度となく引用され、多くの研究者によって注釈を施されてきたが、ここでもう一度その射程を捉え直してみるのも無駄ではなかろう。この小論の文脈において特に注目してみたいのが、形容詞 *hystérique* の名詞 *poète* に対する関係で、これは単なる性質規定と考えるよりは、むしろ同格（詩人とは本質的にヒステリーである）とみなすべきだろう。すなわち、ボードレールはヒステリーを近代芸術家の根本的な資質として要求しているのであり、「この生理学上の神秘」こそが「文学作品の基盤と根底」をなすと断言して憚らない。ヒステリーとは、ボードレールにとっていわば想像力の同義語であり、言い換えれば、共通の凡庸さを超越しようとする芸術家の意思の謂いに他ならな

¹² G. Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, édition critique par Alberto Cento, précédée des scénarios inédits, Napoli / Paris, Istituto Universitario Orientale / A.-G. Nizet, 1964, p. 155.

¹³ Charles Baudelaire, « *Madame Bovary* par Gustave Flaubert », *Œuvres complètes, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. II, 1976, pp. 82-83.

い。従って、詩人がエンマの想像力を「至高の専制的な能力」と呼んで強調するのは、きわめて当然なことだと言えよう。それだけではない。ボードレールは、フローベールの女主人公を彼自身の分身とみなしていた節さえある。曰く、エンマがロドルフやレオンのような卑小な男性に身を任せるのは、「彼女の想像力の詭弁」がこれらの冴えない男達を理想の恋人に作り変えるからなのだ。あたかも想像力による卑俗な現実の変形のみが、近代社会において理想に残された唯一の可能性であるかのように。そして、このような実践は、自称ヒステリーの詩人ボードレール自身にとっても、決して無縁なものではなかったことを、『ボヴァリー夫人』論のテキストは示唆している。

結局のところ、ボードレールがエンマに見て取ったのは、「ヒステリー患者としての芸術家の肖像」だったと言える。そして、おそらくそれはまた、デモクラシーと平等の時代における作家の似姿でもあるだろう。この点に関して、ボードレールがエンマのダンディズムを問題にしているのはとりわけ重要である。実際、『現代生活の画家』の著者にとって¹⁴、ダンディーとは過渡期にのみ現れる存在であり、「卑俗さと戦い、それを打ち倒そうとする欲求」を代表している。とはいえ、この「退廃期におけるヒロイズムの最後の輝き」は必然的に敗北へと運命付けられてもいる。デモクラシーに固有の平等化の論理は、これらの英雄的な反抗者達をも遅かれ早かれ呑み込まずにはいない。ところで、まさにその時こそ、ヒステリーが近代作家の不可避の条件となるのであり、以後、凡庸さという無（rien）の上に文学作品を築き上げる困難な営みがあらゆる作家の宿命となる。従って、ボードレール、そしてフローベールが、この女性特有とされていた病を自らのものとし、またしばしばそのように主張するのは、決して不毛な逆説などではない。むしろ次のような発言は、彼らのエクリチュールの歴史性そのものに深く関わっていると考えるべきであろう。「私は享楽と恐怖をもって自分のヒステリーを育てた」と、ボードレールは『火箭』の中に記している¹⁵。一方、フローベールが『書簡』の中で一度ならず自分のことを「ヒステリーの老人」あるいは「ヒステリーの老女」と呼んでいたことを思い起こしてもよいだろう¹⁶。

¹⁴ *Le Peintre de la vie moderne, ibid., t. II, pp. 711-712.*

¹⁵ *Hygiène, ibid., t. I, 1975, p. 668.*

¹⁶ 例えば、1867年1月12日付けのジョルジュ・サンド宛の手紙には、次のような一節が読まれる。「私は何でもないことで動悸がします。もともと、私のようなヒステリー性の老人にあってはごく当たり前のことですが。というのも、私は主張したいのですが、男も女と同様にヒステリーにかかるのであり、まさに私がその一人なのです。」（G. Flaubert, *Correspondance*, édition présentée, établie et annotée par Jean Bruneau, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. III, 1991, p. 591.）

ブルジョワの時代たる十九世紀においては、「想像力の詭弁」のみが平準化の運動に逆らうことを可能にするのであり、作家達のヒステリーはまさに文学のモデルニテの倫理として理解されねばならないのである¹⁷。

¹⁷ 本稿は、2006年6月にスリジー・ラ・サルで開催された国際シンポジウム「作家、フローベール Flaubert, écrivain」での口頭発表原稿に大幅に手を入れたものである。